市史だより
Gači-inajaa
がちまいなあ

第4号・2005年2月28日（月）発行
年4回（5・8・11・2月発行）

編集・宜野湾市教育委員会文化課 市史編集係
〒901-2710 宜野湾市野嵩1-1-2

問い合わせ・情報提供先
☎ (098)893-4431
Fax (098)893-4434
Kyoiku08@ami.city.ginowan.okinawa.jp

♪女の節句♪

我如古スンサーミー（年代不詳）

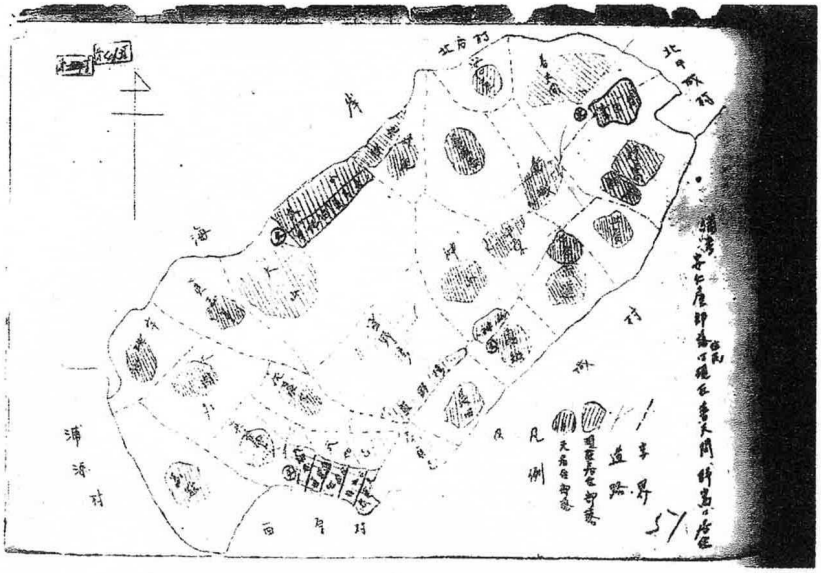
沖縄で女性の行事というと、旧暦の3月3日に行われる三月遊び（サングヮチアシビ）が挙げられるでしょう。三月三日（サングヮチサンニチ）と呼ぶところもありますし、今は浜下り（ハマウリ）という呼び方のほうが、広く知られているかもしれませんね。宜野湾ではサングヮチャーという呼び方が一般的でした。宜野湾でも、その浜の美しさが有名だった伊佐では、昔、サングヮチャーに女性が浜へ下りて行事を行ったと言われていますが、それ以外のところでは浜で行事を行うようなことはなく、その代わりに部落内の家を借りるなどして、そこに14、5歳以上の女性が一ヵ所に集まり、そこでごちそうを食べたり歌ったり踊ったりして楽しく過ごしたそうです。昔は女性が三線を弾く習慣が無かったため、三線や太鼓などの弾き手（男性）を予約し、当日までに栄養をつけてもらうという意味で、弾き手に卵や肉などの食材を届けたり、ご馳走をふるまったりもしたそうです。宜野湾や我如古では、サングヮチャーの日、女性たちによって伝統的な踊りが踊られていましたが、その踊りは「スンサーミー」という民俗芸能として、今でも踊り継がれています。特に我如古のスンサーミーは、戦前から有名だったので、近くの村々からも見物に来る人が多かったといいます。

統計資料にみる宜野湾村の「帰村」概況

1946(昭和21)年8月、野嵩に収容されていた宜野湾の人びとに移動許可が下りました。行政資料から移動許可が確認できる最も早い記録(1946年8月末日調査)には、「我如古嘉数ハ移動許可ナルタルモ建築未了ノタメ居住セズ」と記されています。この記録は、我如古と嘉数への移動許可を示すとともに、野嵩に生活する我如古と嘉数の人びとが、「帰村」に向けて家屋を建築していたことを伝えています。今回は統計資料と見取図から、宜野湾村の「帰村」概況を考えてみたいと思います。

前述のように、宜野湾村では嘉数と我如古への移動許可が最も早く、我如古が1946年11月に、嘉数が1947(昭和22)年1月にそれぞれ居住したと資料には記されています。続いて上原、愛知、赤道、長田も1947年4月には居住字となり、また伊佐や大山などの西海岸沿いの字も1947年5月には居住が確認できます。

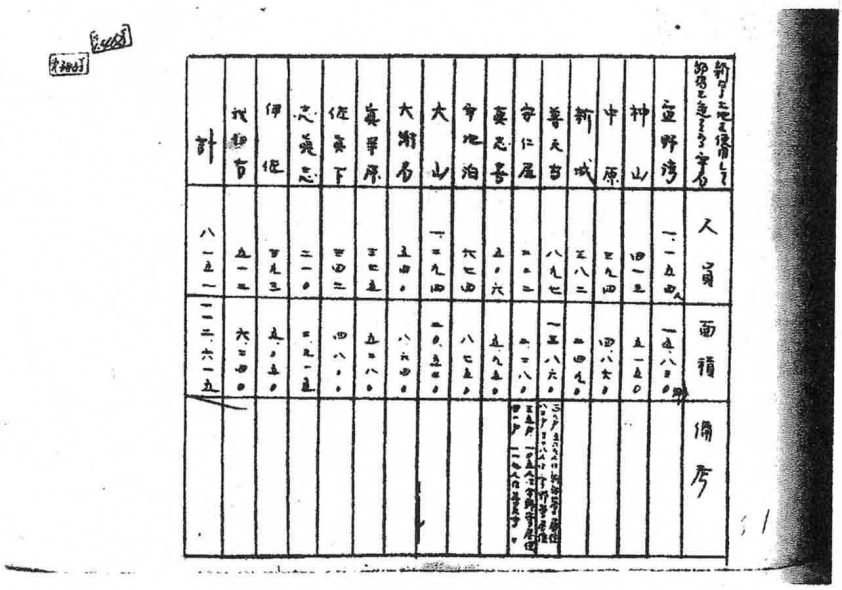
資料1は、1949(昭和24)年5月23日付けで宜野湾村長から沖縄民政府へ通達された見取図です。この時期になると、移動もずいぶんと促進され、村民が野嵩から分散して居住していることがわかります。しかし、「元居住部落」と「現在居住部落」の位置を比較してみると、多くの字が軍用地からはじき出されるように集落を形成していることがわかります。資料2は、資料1に添付されている統計資料です。1949年5月の時点で、実に宜野湾村の15の字が「新なる土地」での居住を余儀なくされていました。人びとの「帰村」は、軍用地の存在によって大きく阻まれます。



(資料 1)

文化課所蔵の行政文書「庶務統計関係書」より抜粋しました。

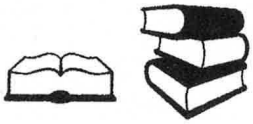
「庶務統計関係書」には1946年から1950年にかけての人口動態に関する統計資料が詳細に綴られています。



（資 料 2）

（資料１）と同様、

「庶務統計関係書」より抜粋。



調査雑感

地域史の編集にとって、市民の皆さまのご協力は欠かせません。わたし達が現在取り組んでいる、戦後の宜野湾市の様子や復興をテーマとした「戦後資料編」に関する調査においても、公的資料の掘り起こしだけではなく、市内の方々からの証言を記録しながら、編集作業を進めています。このコラムでは、聞き取り調査で感じたことを書いてみたいと思います。

戦争・占領体験について、はっきりと記憶されている方は思いのほか多く、中には語り尽くせないといった方もいらっしゃいました。話者の方々から叱咤激励をいただいたこともあります。その一方で、証言をためらう方も決して少ないとはいえません。もちろん、積極的に証言されるようにみえる方にも、語りえない部分があるのではないかと思いますが…。

いずれ近いうちに、これらの調査記録は証言集としてまとめられ、活字化されるでしょう。しかし、整然と文章化された証言集の行間には、このような「発せられない声」があることを忘れてはならないと思います。そして、戦争・占領を体験した人びとの「発せられない声」をたぐり寄せるような想像力を持つことが、今、なにより求められているのではないでしょうか。

調査の一コマ。話者の話に一瞬たりとも気が抜けない。

ソニー坊やを追え！

僕の名前はソニー坊や♪　よろしくね!!　僕の特徴は、ピシッと分けた七三のヘアースタイルに青いジーパンと黄色いセーターのコーディネート。セーターの胸元には“SONY”の赤い文字…。なぜ、僕はソニー坊やと呼ばれているのでしょうか？　みなさんは僕のナゾを知っていますか？

宜野湾市にもソニー坊やがいることを、みなさんはご存知ですか？宜野湾市役所から普天間向けへ約 100m 付近、330 号沿いにひっそりとたたずむ彼の胸元にも“SONY”の赤い文字が記されています。宜野湾市の他にも、４ヶ所の市町村でソニー坊やを確認することが出来ます。ここでは、沖縄県内に残るソニー坊やについて紹介していきたいと思います。

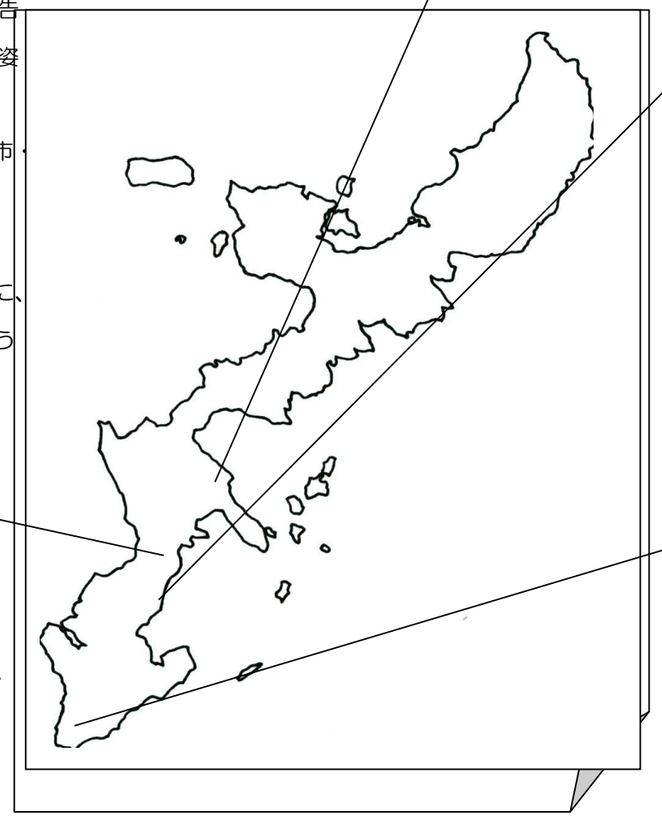
では、セーターに記された“SONY”の文字から、ソニー坊やのナゾに迫っていきましょう。ソニー坊やは実は、ソニーの宣伝用のキャラクターとして、1956 年頃から広告に登場しました。その後、広告を飛び出し、人形やカップなどキャラクターグッズにも使用されましたが、1961 年には姿を消したようです。しかし、今から 40 数年前に、沖縄県内のみに設置された 10 体のソニー坊やの像（全長約２m、コンクリート製）は、今では半分に減り、本部町・具志川市・宜野湾市・西原町・糸満市の５ヶ所で、その姿をかろうじて確認することが出来ます（地図参照　▶）。

ソニーの宣伝のために設置されたはずのソニー坊や…。５枚の写真を見ても分かるように、ソニー坊やの台座にはなぜか「交通安全」の文字が記されていて、人びとの交通安全を願う守り神としてたたずんでいるように見受けられます。

① 宜野湾市野嵩

☆　お目めパッチリの宜野湾市のソニー坊や

市民広場から普天間向けの 330 号沿いに、宜野湾市のソニー坊やはたたずんでいます。洋服は少しボロボロで、多少色あせているものの、今でもくっきりとした、つぶらな瞳は、５体の中でも一番の大きさで、その眼差しは、とても愛らしいチャームポイントになっています。



② 本部町謝花

☆　うつむき気味な本部町のソニー坊や

本部町のソニー坊やは、本部町謝花の謝花団地前でややうつむき気味にたたずんでいます。コーディネートは黄色いセーターにジーパンと、他のソニー坊やと何ら変わらないのですが、本部のソニー坊やだけはなぜか緑色のジーパンで、お肌は５体の中でも一番の色白です。

③ 具志川市安慶名

☆　ピカピカな具志川市のソニー坊や

具志川市安慶名闘牛場入口の向かいに具志川市のソニー坊やはたたずんでいます。目印は闘牛場の大きな看板で、そのすぐ横にソニー坊やはいます。最近、お化粧直しをしたようで、具志川市のソニー坊やは５体の中でも一番輝いています。

④ 西原町兼久

☆　変身前の西原町のソニー坊や

西原町のソニー坊やは、町役場向かいのカドから、現在は 329 号沿いの西原シティー付近に引っ越しています。台座には町花木のサワフジが描かれ、西原町を愛するソニー坊やは、クリスマスの時期になると、サンタクロースの衣装に衣替えをするそうで、その姿は５体の中でも一番華やかになることでしょう。

⑤　糸満市名城

☆　肌荒れが目立つ糸満市のソニー坊やプールの側にたたずんでいます。ビーチに

糸満市のソニー坊やは、名城ビーチ内のいるため、潮風にさらされた糸満市のソニー坊やはお肌も洋服もボロボロですが、それでも海に遊びにきた人びとの安全を願い続けるその姿は、５体の中でも一番健気（けなげ）な印象を受けます。

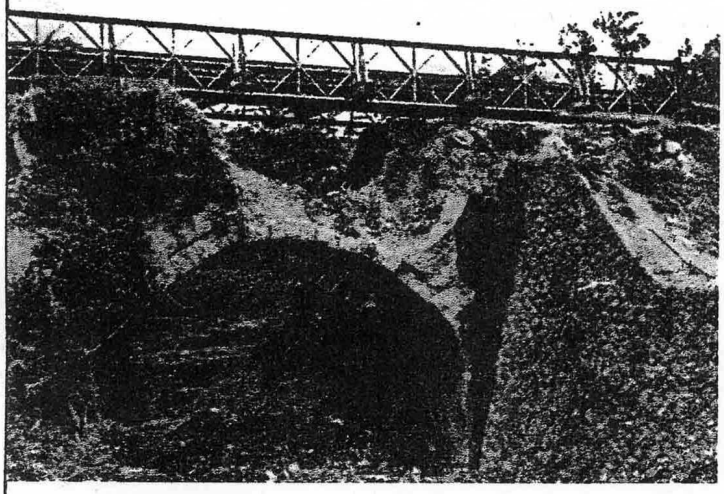
●シリーズ歴史の道④

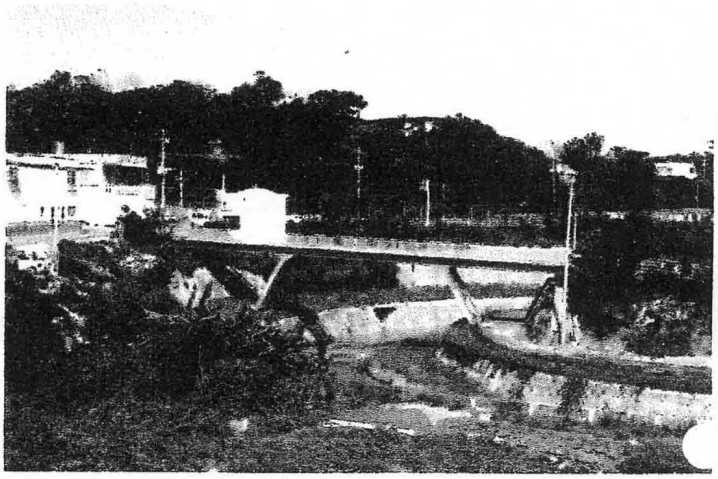
普天間橋

国道330号を普天満宮から北中城村石平向けに行くと、途中、普天間川に差し掛かり、石平橋を渡ります。この石平橋から東側、石平集落側を眺めると赤色のアーチ型の鉄橋が見えます。これは「石平人道橋」と言う橋ですが、この場所には、かつて石灰岩製の石積みでアーチ型に作られた橋が架けられ、「普天間橋」と呼ばれていました。

普天間橋の建造年代は不明です。1945（昭和20）年の沖縄戦では、日本軍がアメリカ軍の進攻を妨害しようと橋の上部を破壊しました。しかし、アメリカ軍は破壊された橋に鉄橋を架け進攻を続けました。この橋は戦後も普天間や石平、安谷屋住民の生活道路に利用していましたが、老朽化に伴う危険性から1980年代に撤去され、現在の石平人道橋が設置されました。

今では普天間橋の痕跡もなくなり、国道330号を通る石平橋が普天間橋と思われるなど、人びとの記憶からも消えかけている面も見られます。改めて地域にあった名所旧跡、馴染み深かった生活の場を再確認してみてはいかがでしょうか。

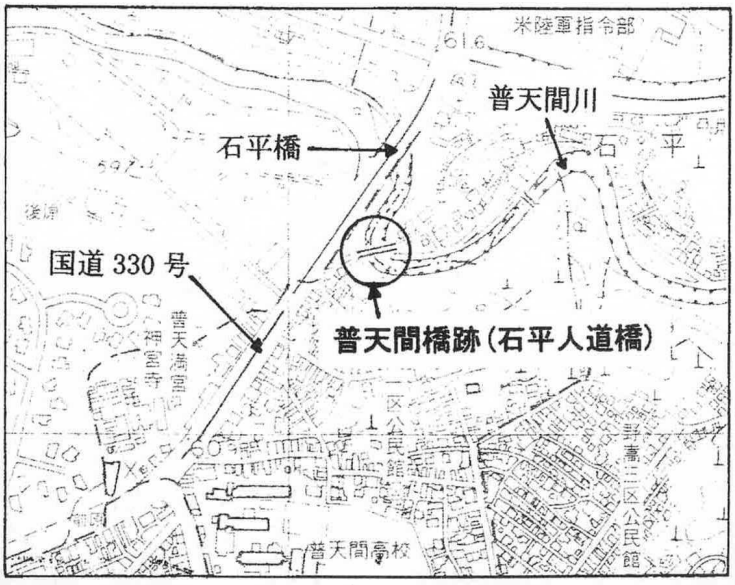




写真左　：　1945（昭和20）年の普天間橋。
日本軍が破壊した橋を、アメリカ軍は鉄橋を架けて進攻を続けた。

写真右　：　普天間橋のあった場所。石平人道橋。

地図　：　普天間橋の跡



豚も出生届？！

今から41年前になる1964（昭和39）年の4月に発行された「広報　宜野湾」（現在の「市報　ぎのわん」）には、仔豚の　出生台帳に関する記事が載っています。この記事は、豚の病気の予防対策を行うために仔豚が生まれたときは、自治会長さんを通して、市役所に、生まれた仔豚の数、生年月日、性別を届けるようにという通知の内容でした。新たに生まれた仔豚の情報は、市役所で台帳に記入され、予防注射の計画づくりに役立てたり、病気がはやったときの対策に活用されました。豚も人と同じように大切に育てられていたことがわかりますね。そして、届け出が必要とされるくらいですから、その頃は宜野湾市内でも、いかにたくさんの豚が飼われていたか、うかがい知ることができます。現在でも豚肉は、沖縄に暮らす私たちにとって、身近な食材ですが、当時はそれ以上に「身近な存在」だったのですね。

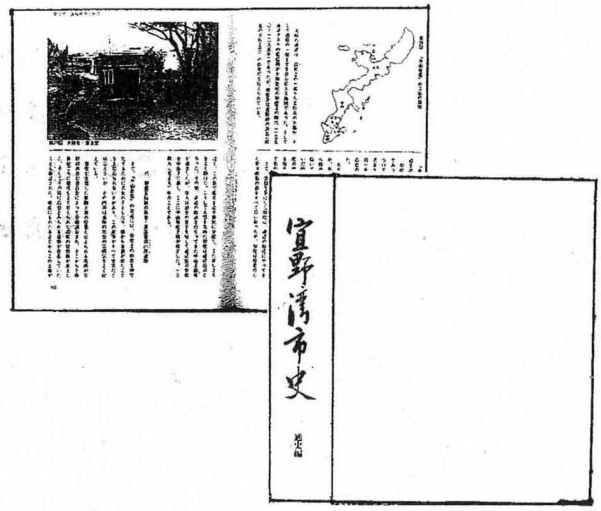
裏話　＊男の節句？！　旧暦3月3日の行事が、女性主体の行事であるのに対して、じつは男性だけの行事というのもありました。これは旧暦の2月2日に行われていた腰憩い（クスッキー、クシユクヮーシとも呼ぶ）という行事で、宜野湾一帯の村では、どこでも年中行事として行われていました。もともとは田植えが終わった後の慰労会だったようです。部落内で組ごとに分かれるなどして、その中の大きな家に集まり、米や豆腐を持ち寄ったり、集めた参加費で豚や酒を買って、それらの材料で料理を作りました。そして歌や踊りなどをみんなで披露して楽しんだようです。参加を始める年齢は部落によって違いがありましたが、だいたい13、4歳前後からクシュックィーの集まりに加わっていたようです。その年代にさしかかった男の子たちは、一人前の男性の仲間入りするときを迎えて、誇らしさや緊張感を味わったのでしょうね。

市史編集係からのお願い

市史編集係では、現在、宜野湾市内各字での戦後の復興について、また戦前・戦後の綱引き行事に関して、調査を行っております。皆様のご協力を頂けますよう、お願い致します。それらに関して、また、それ以外でも、ご自宅に、かつての宜野湾の様子をうかがい知ることのできる写真や書簡等の記録資料がございましたら、ぜひ下記連絡先までご一報ください。市史編集事業の貴重な資料として活用させて頂きたいと思います。なお資料は、接写等の方法により複写させて頂いた後、原本をお返しすると共に、複写したものを一部お渡しいたしております。

TEL ☎098－893－4431　／　FAX 098－893－4434

❀3月おすすめの本❀



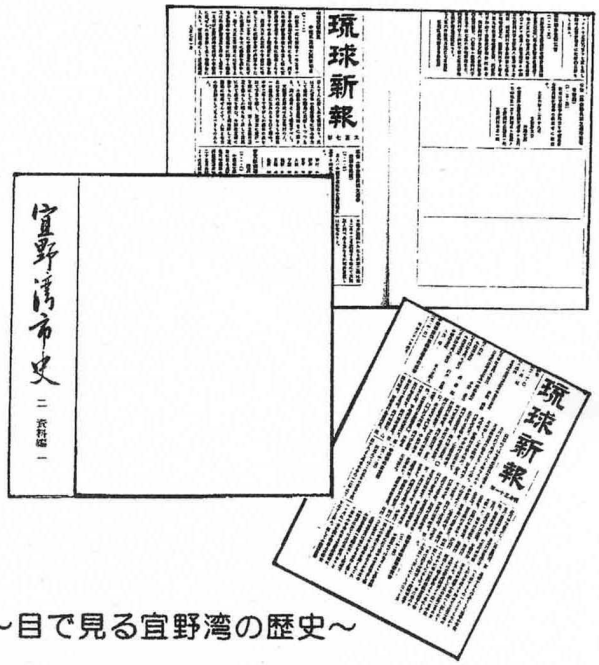
～宜野湾市史全９巻の入門編～

『宜野湾市史　第一巻』(通史編)

¥2,000(税込)

いにしえから現代に至る宜野湾の自然、考古、歴史、教育などを時代ごとテーマごとに網羅。過去から現在までの宜野湾市の歴史・文化などを垣間見ることができる一冊！

【目次】序.地理　1.考古　2.古琉球　3.近世
4.近代　5.沖縄戦　6.現在

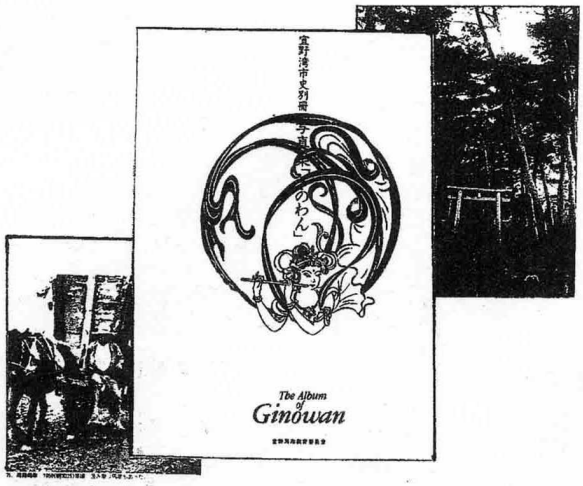


～過去の記事から歴史の記憶を探る～

『宜野湾市史　第二巻』(資料編1)

¥3,150(税込)

1898（明治31）年から1918（大正7）年までの新聞記事を収録。宜野湾に関する記事を詳大に拾いあげた。その当時の政治・経済・教育・社会文化などを捉えることができる貴重な歴史資料！



～目で見る宜野湾の歴史～

写真集『ぎのわん』¥1,500(税込)

明治からの宜野湾と人びとの移り変わりを写真で紹介。戦前の宜野湾村役場や普天満宮、ジノーンナンマチ（宜野湾並松）や軍国主義へと移り変わる軍事教練、復興の様子など人びとの生活や社会が写し出されている。おすすめの一冊！

※この他に市史1～9巻・写真集など、宜野湾市の歴史・文化・自然に関する本がまだまだありますので、ぜひ、お求めください。詳しくは、宜野湾市教育委員会文化課市史編集係　☎ (098)893－4431
HP http://www.ginowan-okn.ed.jp/con7/bunka/sisi.html まで！